哲学における論理

36期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

哲学というものについて興味をもってから、文献を2、3読んでいたところ、そこには論理というものの動かし難い重要な役割が、必ずといっていいほどどれにも描かれていたのである。そこで思いついたのが去年の自由研究との関連づけであった。哲学における論理というものの役割をまずある程度明らかにしたあと、最終的に2年間のまとめとして、一体論理というものの正体は何なのかを追求してみようと考えたのである。

Ⅱ　研究方法〈構成〉

例年通り、やはり自分の選んだ数冊の文献を使用しつつ自分でテーマを設定してゆく。

今年も、大きなテーマは3つであるが、ただ今回のは結論というよりは「総括」といった方が適当で、つまり2年と3年の研究より、自分の論理に対する主観も少なからず含まれているということである。

1. 哲学の世界へ……"哲学とは何か"などと大それた問題に突入するつもりでは決してない。つまりは哲学というものに少しでも感覚的にふれることができれば、といった目的で設けたものである。
2. 論理学の実体……これは題目通り論理学の実体を知ろうとするもので、特に現代論理学については、次の哲学の歴史をみていく中で一つのポイントとなるという点で。
3. 近代哲学と論理……この研究の柱となるテーマ。アリストテレスによる形式論理学は、今日に至るまでどのような道を歩いてきたのか、又それによって論理と哲学の結び付きも次第にわかってくるはずである。

哲学における論理		2・3年総括
①　哲学の世界へ― ∘出　発　点 ∘科　　学 ∘哲　　学 ◉問いと答え 「哲学とは何か」 ∘無政府主義の背後に ∘現代の哲学地図 ∘哲学の研究	②　論理学の実体― ◉認識論と論理学 ◉現代の論理学 ③　近代哲学と論理― ◉論理学の歩み ◉近代哲学と論理 ∘デカント •カント ∘ヘーゲル	☆　結　論 「論理」について

※◉…ポイント

Ⅲ 研 究 内 容

◀私の哲学・感

①のテーマは全体の流れと直接関連するのではなく、むしろ前提といった形なので、後でもう一度流れを組むときには省くことにし、それゆえ、ここで自分として感じた（共鳴した）哲学について、簡単に述べておこうと思う。

•「知識を明確にする」ということは、一体どういうことだろうか。私たちの知識がバラバラに集められた個々の知識の組織なき全体であるならば、それは人間の行動に有効な影響を与えることができない。従って知識が正常に働く限り、それは絶えず変化する行動への要求にふさわしい組織化を必要とする。この諸々の知識を有機的に統轄していくという知識の一つの仕事を私たちは愛知の活動、すなわち哲学とよぶことができる、というのである。

•哲学することを深めてゆくためには、二つの側面からの正しいアプローチが必要となるだろう。ある人は自分の生活のなかの問題に対する悩みや苦しみを解決したいといういわば生活的な関心から哲学に興味をもつようになるかもしれない。しかし他の人はすでに自分が選んで研究している他の学問をより広く矛盾なく体系化しようとするときに当面する困難な問題解決の為に、哲学というより全体的な地図が必要であると感じ始めるかもしれない。哲学への導入はこの二つのどちらからでも可能である。……

•「哲学は万学の女王」「哲学は生活と学問の公僕である」

★ところで哲学の深さ、それは明晰に直観され、明晰に思考され得るものでなければならない。明晰に考えることを学ぶというのは何よりも分析を学ぶこと。直観とか綜合とかいうものは、それが「学問」となるには、論理をくぐってこなければならない！

前にも記したように、発表ではわかりやすくするためにあえてポイントをしぼって流れを少し変えて構成したわけだが、ここでも因果関係をはっきりさせるのと、紙面の都合上、その構成に従って記述を進めていこうと思う。

①思考法則としての論理 ②現代論理学のポイント ③論理学の歩み	哲学における論理	➡	言語との関連性	④「哲学とは何か」の問いと答えの関係 ⑤言語と思考
∴ 論理とは何か（２年間の総括）―その存在価値と方向づけ				

① 思考法則としての論理

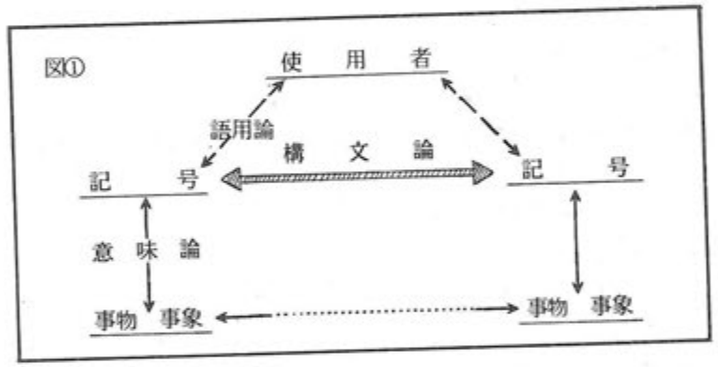
従来論理とか数、こういう思考法則は事実の法則ではなく当為の法則すなわち、こうあるべきであるという定まりを表すところの法則というふうに考えられてきたわけで、その背後には事実と理念、事実と価値又は当為といった二つのものをはっきり区別する。従って事実の法則と当為の法則とは違うのだ、という一つの哲学的な態度というものが存在しているのである。

人間の思考の法則というものをどういう点から見ていくかという点についてもいろいろな見方がある。古い古典的な形式論理学ではそれを比較的に単純な形式で体系化しようとする。これに対し現代ではもっとこまかくて、かつ広い形式化の立場からそれをながめていこうとする。この違いが非常に重要になるのである。簡単にいうと前者は「語」の論理、後者は「文」の論理、ということができるだろう。

② 現代論理学のポイント

論理というものの性格をもう少し具体的に、より限定してとらえる為には、まず記号というものの一般的な働きを分析してみる必要がある。記号論によると、記号は三つの側面を同時にもっており、それぞれ名称と独自のはたらきは次のとおりである。

(1) 語用論	記号とこれを使用する人間の関係
(2) 意味論	記号とそれが指し示す事象の関係
(3) 構文論	**一つの記号と他の記号との関係**



現代の論理学では、まず最初に文と文との色々な結びつき方の可能な全体のなかから一つ一つの文の真偽とは無関係に成り立つような論理的に妥当な結合の仕方を区別し、それらを公理化していくという命題論理学から出発する。ところで先ほど太く示した(3)の構文論だが〔記号と記号の結合の働きをする記号〕として、問題になる文と文とを結合する働きをするもの、つまり接続語が挙げられる。これらを論理語とよぶが中でも基本的なものは次の四つである。これを中心に人間の思考の法則というものを再編成することを試みる。

論理語	論理変項
「ない」	' − '
「そして」	' • '
「あるいは」	' ∨ '
「ならば」	' ⊃ '

◀例

☆明日は雨が降るか、あるいは風が吹く
└p（命題）　└q

➡ " p∨q "

★明日は雨が降り、そして風が吹かない
└p　└−q

➡ " p•−q "

的明確化」であるとすれば、それが図解した「言語の論理的分析」へつながるということとも一致するのである。

V 総　括

私が論理というものに強くひかれるのは、そこには人間の感情やそんなものに惑わされることのない絶対的真理があるという点にである。不幸にして現在まで論理とか論理学というものは多くの人々の環境の中に立たされる機会をもたなかった。それは「論理学」としては哲学者たちの蔵品の一部として戸棚の片隅に置きざりになって人目にさらされず、また「論理」としては、ある種の社会形態のなかでは一般民衆がもつには「好ましからぬ武器」として意識的に敬遠されてきた。しかし現在のわが国は近代民主主義国家の線に沿って歩んでいる。そこでは政治も日常の人間関係もすべて言論の自由の原則にしたがっておこなわれねばならない。「論理」のための社会的苗床は用意されているのである。また実際に論理の価値とその重要性も次第に認められてきている。

2年通して感じたことはそこでは意外と、基本的な骨組み、つまり当然のことをいっているということだ。それは私達が使う言語の中にも存在し、且つ、これからの哲学的方法論の思考を考えていく上での道具ともなるものである。論理—それはただ単に"すじみち"ではなくて、少なくともある明確な目的をもったすじみちというべきだろう。そして論理学の本質をそのような眼で観、考えるならばそれは確かに「すべての学問の道具である」ということができるのではないか。単に敬遠するのでなくそこにある働きを見極め、実質的問題解決への努力をしていくことは、これからの社会を築いていく上でも、決して無駄ではないことだと思う。

Ⅵ 感　想

今年の研究は、主張も明確でむしろ派手だった去年に比べると、外延はより広くなったがすこぶる地味なものになったと思う。しかし、また自分の研究の完結としては、ふさわしいテーマだったと満足している。今回で形としての自由研究は終了するわけだが、3年間を通じて、真に自分のひかれるものに対しての自分の情熱には、限りないものがあるのだということを知った気がする。そして実際はこれからが、自分の本当の自由研究の、幕開けなのかもしれない。

参考文献

三木　清「哲学入門」岩波新書
沢田允茂「現代論理学入門」岩波新書
沢田允茂「論理と思想構造」講談社学術文庫
カント著　天野貞祐訳
　　「純粋理性批判」(一)～(四)　〃
沢田允茂「哲学」有斐閣双書
吉田夏彦「論理と哲学の世界」新潮選書